JRCU JR東海労

東京地区分会情報

2015年12月24日
第 189 号
発行責任者 菅野政広

「野坂昭如」という作家が逝った

【妻陽子さんの葬儀でのあいさつ】

「戦争してはならない」と言い続け

のんべい、めだちたがり、せっかち、うそつき、いいかげん、まだまだいっぱいあります。野坂昭如さん。春の夜でした。

私はその時 19 才のタカラジェンヌ。初めて会ったその人は、夜なのに真っ黒い眼鏡をかけ、グラス片手に早口でしゃべっていました。

変なおじさんという印象でした。夏の神戸、六甲山でプロポーズされました。何を言うかと思ったら「僕まつげがないんです」外された黒メガネの下には、しっかりまつげがありました。きっと眼鏡の下の素顔を見てほしかったのだと思います。

21 才の花嫁は何も分からず、とんちんかんな新婚生活はコントのようでした。

矢のように過ぎた日々。待っていたのは 13 年間の介護生活です。私にとっては、とても長い年月でした。不安だらけの介護。押しつぶされそうになりました。いいことも悪いことも、どうにか越えてきました。

彼の周りにはいつも家族が集まり、小さな孫や猫が絡みついていました。

二人の娘は「パパには寝間着は似合わない。いつもかっこいいシャツで」とダンディーな父親を守り続けました。野坂は満足だったと思います。

亡くなる間際までいい続けた、大事な言葉。「戦争をしてはならない。巻き込まれてはならない。戦争は何も残さず、悲しみだけが残るんだ」

「火垂(ほた)るの墓」は世界で読まれています。日本の大事な一冊になってほしい。

野坂は生まれて２ヶ月で母親と離されてしまい、母親の顔を知りません。きっとそのお母さまが迎えに来たのでしょう。

目を閉じた顔は美しく穏やかで、初めて見る表情でした。ちょっと嬉しそうな笑みは、母に抱かれた昭如少年だったに違いありません。

今までお世話になった大切な皆さまに、野坂とともに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました（12/20 東京新聞より）

【コ メ ン ト】心より野坂氏に哀悼を捧げたい。戦争という行為を憎むあまり、多少捻くれた生き方だったのかもしれない。ただ小説「火垂るの墓」は、一人の女性の存在なくしてこの世には送り出されなかったことをこの紙面を通じて知った。

あらためて、野坂氏の魂を後世に伝えるとともに「反戦と平和」への思いを強くした・・。